
魔法先生ネギま！～狐と兄の燈し語・改～

皐月二八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜狐と兄の燈し語・改〜

【Nコード】

NO011Y

【作者名】

皐月二八

【あらすじ】

神となった元人間、夜白 刹那と天狐の輪廻、麒麟の煌月、娘達に半神人と化した桜咲 刹那や龍宮 真名たちが管理している“世界”のとある空間。輪廻と娘達は、刹那に与えられた（押しつけられた）新たな仕事に激怒し、家族を連れて新設“世界”に降り立った。とある一家+ がおくる、何の望みも無い物語、のたのたと始動！

1 輪廻side 始まりは彼女の主張から（前書き）

！注意！

本作は『魔法先生ネギま！』狐と兄の燈し語』の再編集版ですが、
全くの別物だとお考えください。共通点は一部のキャラと設定くら
いです。

本作では輪廻たちが国をつくります。

1 輪廻side 始まりは彼女の主張から

人間という生き物は、まあ、神とか妖怪とか神獣とかの大部分もだけど、兎に角視覚からの情報に頼る傾向がある。認識も主観も客観も思考も存在も純愛も殺意も無関心も、その構成に大きくウェイトを占めるのは視覚情報だ。

故に、視覚情報は脳に重大な楔を打ち込む。愛憎喜怒哀楽、様々な感情を呼び起こさせる。そして打ち込まれた楔は、そう容易く消えやしない。視覚を通して脳に刻み込まれたかのように。それは、消えない。

消させはしない。それが、忘れたくないものだとしたら余計にそう思うだろう。忘れないということは、その視覚情報が生涯影響を及ぼし続けるということだ。つまり、残り続けるのだ。

行動に、思考に、感覚に、価値観に、倫理に、未来に、現在に、影響を与えていく。壊して、包み込んで、再構築して、繋ぎ止める。

……まあ、長つたらしく説明しだして、結局何が言いたいのかというし。

お兄ちゃん、愛してる。

その髪も、瞳の色も、顔も、容姿も、視覚に入ってくる全ての情報は勿論、視覚に入らないもの、他の五感で感じ取れるもの、感じ取れないもの、全てを愛してる。

長所も短所も愛してる。「優しい」だとか「カッコいい」とか、そんな長所……相手の一部しか愛せないような愛を、私は愛とは認めない。

顔が良い人が好み？ だったら自分好みの顔を絵で描くなり何なりして、一生眺めていれば良い。

頭が良い人が好み？ 頭の良さの基準なんて、周囲の環境や時代の趨勢で幾らでも変化を遂げてきた。

心優しい人が好み？ その優しさが自分に向けられるだけのモノだとしたら、そんなもの、誘蛾灯に誘われる蛾のようなものだ。

力が強い人が好み？ それでは強い雄オスに惹かれ、より優秀な種を残そうと本能という鎖にがんじがらめにされた獣ケタモと何ら変わりがない。雌メスでは無い、女オンナはもつと理性を持たねば。

そんな不完全な愛と、私の愛は全く違う。

私を指して“ブラコン”と呼ぶ者もいる。確かに、私はお兄ちゃんケタモの妹だ。

勿論、神になった人間に天狐の実妹がいるわけもなく、あくまで義理の妹ということになるが。

お兄ちゃんのことだけを年がら年中考えている私は、確かにブラコンではある。否定はしない。

でも、私の愛は完全にして本物。そうでなくてはいけない。

お兄ちゃんだけの天狐として、女として、雌として、奴隷として、手足として、お兄ちゃんへの愛は、常にこの身に溢れさせていなければならぬ。

無論、そんな事を考えるまでもなく、お兄ちゃんへの愛はいつぱいだ。

お兄ちゃん以外、何の興味も見いだせなくなるくらい。お兄ちゃんのためなら、“世界”全てを殺し、創造神幼女を跪かs……あいつはウザいから殺すか。

まあ、それくらい片手を振ればできることだし、大して大事でもないから、比喩としては不適切だろう。

兎に角、何でもできるくらいお兄ちゃんが好きだ。

お兄ちゃんが望めば、何だってしてみせる。

お兄ちゃんが望まないモノは、全てを壊しつくしてみせる。

……おっと、お兄ちゃんのこととは極の言葉をもってしても、永劫の時をかけたとしても言い尽せない。

そろそろ一旦終えて、自己紹介でもしようと思う。

夜白やしう 輪廻りんね。

そう名付けられ、そう名乗っている“天狐てんこ”。それが、私だった。

愛しいお兄ちゃん……夜白やしう 刹那せつなは、私を指して良く言う。

「黒くて白い」と。

闇を芯まで吸い込んだような漆黒の長髪。何処までも磨く抜いたような純白の肌。

身に纏っているのは漆黒のドレス。大きく空いた胸元や、ドレスから伸びた手足は純白。

お兄ちゃんと私にしか見えない、髪の間から顔を出している狐の耳……そしてお尻のあたりから生えている伸縮自在・変幻自在の九

本の尻尾は、髪に負けなくらい漆黒に染まっている。
コントラスト。

お兄ちゃんの好きな色。
だから、私も大好きだ。

唯一、瞳だけは右目が紅、左目が翡翠色だけど、此れは此れでお兄ちゃんへのアピールポイントとなる。

一六〇くらいの小柄、細身でもお兄ちゃんを快楽に誘う豊富な胸とくびれた腰、大きいお尻に蠱惑的なシルエットの太股、スラリと伸びた足。

何れも、あらゆる異性を魅了する天狐キツネの魅惑チャームとフェロモンに満ち満ちている。

もっとも、お兄ちゃん以外の異性を誘惑する気など全くないけど。

……と、まあ、自画自賛（一〇〇パーセント真実だが）が一段落ついたところで、そろそろ現実に目を向けようかと思う。

「聞いているのですか？ 輪廻さん！」

“娘達”ドクターズ。そう呼ばれる二八人の女がいる。

お兄ちゃんが、担当する“世界”管理用に創造した神工生命体で、何の束縛も制限もない特殊な存在。

その長女、つまりリーダーが、今、私の執務机を容赦なく叩いている夜白ヤシロ 硯璃スズリだ。

制服ではなく、私服……彼女の場合は藍色の振袖を着込んだ、純白の長髪と瑠璃色（ラズラスリ）の瞳が特徴のこの少女は、私より一〇センチくらい背が高いモノだから、しかも私が座っているのに対して硯璃の方は立っているのだから、私を見下ろす形で仁王立ちしている。そして、私と同等かそれ以上に大きい胸が、彼女の怒りを体現しているかのように震えていた。今にも着物から飛び出してきそうだが、同性愛（レス）の趣味がない私には何の魅力も感じない。

“娘達”（ドクターズ）は基本的に、性格は私か煌月（ヒュウキ）（私と同じく、お兄ちゃんに絶対の忠誠と愛を誓っている“麒麟”（キリン））がベースになっている。これは、お兄ちゃんが私たちの人格をベースにした方が、創造しやすかったからだ。

そんなこともあって、そしてお兄ちゃんの愛情たっぷり子育ての結果もあって、“娘達”（ドクターズ）の面々は程度の差こそあれ、全員がファザコンになっている。

普段は妹に対して高圧的で、自分こそがお兄ちゃんに最も愛された存在と公言して憚らないこの超弩級にムツカツク（エセ）似非大和撫子が怒る理由は一つしかない。

すなわち、お兄ちゃん絡みだと相場は決まっている。

ていうか、私は既に知っている。

それこそ、溜息を吐きたいぐらいに。

「創造神（アリス）の奴……御父様を、動かしやすい動かしやすい下働きか何かと勘違いしているのではありませんか……！？

何たる屈辱！！ 何たる侮辱！！ 何たる傲慢！！ 御父様は、私（わたくし）の偉大な偉大な御父様は創造神（アリス）如きに如何こうできる程、低俗な低

俗な存在ではありませんのに……巫山戯てますわ!!」

怒り心頭ここに極まり。

純白の肌を茹でダコのようにし、ぶるぶると震えている硯璃が机を叩くたび、この“世界”が消滅する程の神力が放たれる。まあ、境界を張って防いでいるけど。

幾ら片手間程度で張れるチャチな結界と雖も、こんな小娘に壊されるほど、ヤワな結界など張らない。

そんなことよりも、だ。

ああ、確かに私も怒っている。
でも、まあ、あれだ。

怒っているときに自分以上に激怒している人間を見ると、かえって怒りが冷めるヤツ。

そんな感じで、私の怒りは創造神を数京回甚振り騁る程度で済ませれば落ち着く程度の怒りまで鎮静化していた。

それでもあまりの怒りに、口から出た吐息がそのまま“狐火”となつてでてきそうだが、まだまだ自制が効くレヴェルだ。

神というのは、幾つもある“世界”を担当している。といつても、地球なら地球で系統があり、其れを数人の上級神、そしてその下の中級神と下級神が管理している。

一方で、人間から神になったという前代未聞の前歴を持つお兄ちゃんの場合、私たちだけで独自に担当させられている。

お兄ちゃんは創造神の支配下には無いので聞く必要はないのだが、人が良いお兄ちゃんはあると受け入れてしまった。全く、お兄ちゃんの優しさを利用した神共が憎くてたまらない。

その数は、あくまで身内だけという理由で現在二つ。かなり少ないが、精々が三五、六人程度の夜白家^{わたしたち} + で管理していることを考えると、寧ろ多い位だったりする。

お兄ちゃんを過労死させたいのか、と言いたいところだが、当のお兄ちゃんが不平不満の一つも言わないので仕方がない。

その上で、だ。

地球系統の新設“世界”をお兄ちゃんに頼みたいと、創造神アリス^{ヴェロキティスタニア} || V || R || スウォルディナから通達があつたのだ。

それに、私たちは激怒した。

お兄ちゃんを愛する者として、お兄ちゃんの意のままに動く奴隷として、お兄ちゃんの過労を増やすような真似を容認できるわけがない。

キレるぞ。

そう言って叫び、暴れられればどれだけ良いか。

でも、お兄ちゃんは苦笑しながら二つ返事で了承してしまった。

……こつなつたら、もう何も言えないじゃないか。

「一体どうしたらいいのでしょうか……全く、厄介な厄介な……いえ、御父様に仕事をさせなければ、全部済むのですが……いつそのこと、私が直接^{わたくし}……」

「……そうだ」

「はい？」

顎に手をあて、部屋の中を動き回っていた硯璃は素っ頓狂な声をあげ、私を見つめた。

「……………輪廻さん？ まさか……………」

「私が行く」

そう、私が直接行けばよいのだ。そして、その“世界”を管理しつつ、暇を見つけてはお兄ちゃんに報告がてら逢いに行く。お兄ちゃんから一秒でも離れるのは辛い、お兄ちゃんの過労を抑えるためなら、何てことはない。……………そうだ。

「硯璃……………今、すぐに動ける娘達手駒は？」

「愚妹共ですか？ 今は両“世界”は現世・冥界ともに安定期に入っていますから、そらい穹斐・骸垂がいあ以下……………半分くらいは動かせませんが……………何か？」

「簡単な話よ。……………貴女たちも来なさい」

「え？」

「私と娘達あなたたちだけで“世界”の管理ができるかどうか……そのテストケースだとお兄ちゃんには上申しておくわ。そうすれば、その“世界”は基本的に私たちの思うまま……」

其処まで言つて、私はニヤリと笑った。お兄ちゃんには、絶対に見せない類の笑いだ。

向こうも察してくれたのか、私と同じような顔になってきている。

「硯璃……お兄ちゃんを“神”とする国、創つてみたくない？」

「みたいですよ、輪廻さん!!」

顔を輝かせ、御淑やかな振る舞いなど完全に吹き飛んだ大和撫子（笑）は、大声をあげて拳を握った。

「何時も、何時も思っていたのです……此の“世界”の人間どもは、全知全能の、究極にして至高の、神聖にして絶対なる御父様に感謝の一つも述べやしません!! 何度、何度消してやるうかと、跪ヒザマズかせてやるうかと思つたことでしょうか……」

御父様は其れを望んでいなかったから、ずっと我慢してきましたわ!! ですけど、管理権が輪廻さんや私に移れば……」

「ええ、ある程度の干渉は許されるわ」

幼女 やりすぎても問題ない。どうせ、この仕事を押し付けて来たのは創

造神共だ。

その“世界”に、お兄ちゃんを神とする国を創るくらい、文句は言わせない。

言ったところで、擦じ伏せるだけだ。

鼻唄を歌いそうになるのを我慢しながら、私は席を立って歩き出した。

1 輪廻side 始まりは彼女の主張から(後書き)

次回は刹那sideです。

御意見御感想宜しくお願いします。

2 刹那side 麒麟と妹の願いは（前書き）

本作は基本的に、色々な人の視点で書いてみようかと思っています。

やはり改訂前の輪廻視点+第三者視点だけは、些か無理がありましたので。

タイトルの○○sideの○○の人物の視点で、物語が進んでいきます。

2 刹那 side 麒麟と妹の願いは

“空間”という、直球というか味気ないというか、兎に角そんな名で呼ばれている空間。

其処には様々な施設があるが、“世界”を管理するための部屋が多い。

もともと、俺 夜白 刹那の場合は、輪廻や煌月、そして補佐に回ってくれているサクや真名・娘達が大部分を片付けてしまうから、寧ろ驚くくらい仕事がなかつたりする。

此処まで仕事を取られてしまつとかえって面目が無い……と言いたるところなのだが、全員好意でやってくれているのだから、それを無下にするわけにもいかない。

気をかけられすぎると、困りモノだぜ？

そんなこんなで、俺の執務室は大して多くない書類と、執務しているのかも妖しい男と、俺の脇で控えている美女だけ という、はたして執務室と言えるのだろうか些か微妙な状態なのだ。

夜白 煌月。 神界では、天狐の次に能力が高いとされる準最高位神獣“麒麟”。

ある日、墜ちてきたところを看病したら妙に恩義を感じてくれたらしく、以来、ずっと俺に仕えてくれている。

身長一八〇センチ以上の長身に、セミロングの透き通るような白に近い水色のストレートヘア。何を考えているのか、俺と輪廻くらいしかわからない水色の瞳。

常に無表情で、変化に乏しい。俺ですら、彼女の表情を見分けるのは至難の業だ。

其れを差し引いても、絶世の美女だと言えるだろう。

彼女は大抵、何故か男物の執事服を着ている。夜白家の中でも断トツでスタイルが良いから胸の部分がはちきれんばかりになっているのだが、どういうわけか物凄く似合っている。

そう言ったら、煌月は何時も嬉しそうに頭を下げていた。

秘書官か何かのように、煌月は俺の仕事をサポート……どころか、俺の仕事の九割九分をこなしてしまう。

何度か「仕事をやらせてくれ」と言ったが、煌月は絶対に譲らなかつた。そうならなくていいぜ？　と言っても、兎に角譲らないモノは譲らない。

煌月は俺にはとても従順だが、特定のことに関してはとても意固地になる。こうなると、もう鋼の意思どころかダイヤモンド金剛石の意思だ。

今日も、なけなしのプライドのために、大分少ない仕事に精を出しているときだった。

「お兄ちゃん、失礼します」

ドアがスライドし、漆黒のドレスと輝く純白の肌を持つ美少女が入って来た。

最高位神獣“天狐”の唯一の生き残りにして、特別中の特別な存在。

生やしている尻尾一本分が、並みの天狐一匹分の力を持っている…
…そして輪廻自身には、並みの天狐の数十匹分の力があるという、
とんでもない存在にして、俺の唯一無二の妹。

「輪廻？ どうしたのですか、刹那様は執務中ですよ」

声をかける煌月に、輪廻はクスリと笑いかけた。

「少し話があるの。煌月、悪いけど手間は取らせないわ。お兄ちゃんに迷惑をかけるなんてこと、私には死んでもできない。それくらい、貴女も知っているでしょう？」

「そうですね。言うてみただけです」

煌月は棚からカップを取り出し、ティーポットで紅茶を淹れ出した。
アッサムの香りが、室内を満たしていく。

「…………お兄ちゃん…………」

「うおっ」

気が付くと、目の前に輪廻がいた。瞳を潤ませ、頬を朱に染め、俺の胸に抱きついてくる。

九本の尻尾がシュルシュルと動き、優しく俺の身体を包み込んだ。

輪廻が言っていた。「私の尻尾には意思がある。そして尻尾もまた、たまらなくお兄ちゃんを愛し、求め、お兄ちゃんの敵を殺したがっている」と。

尻尾は、俺の身体のおちこちをそのまますりすりしてきた。此方も手をあて、ふさふさの尻尾を撫でてやる。

滑らかで、柔らかくて、暖かくて、最高級の毛皮など目では無いくらいに気持ちいい。

「あつ……んつ……」

嬉しそうに目を細め、身体をくねらせる輪廻。子犬か何かのように、拙くとも甘え続けてくる。

さらさらの黒い髪も撫でてやると、ますます嬉しそうに俺の胸に頭を押し付けた。

何処か甘く、優しい匂いが満ちていく。

そして……身体に、輪廻の凄く柔らかい部分も当たるんだが……此れだけは慣れん。

「輪廻、少し」

離れてくれ。

そう言おうとした瞬間、背中にさらに柔らかい感触が襲いかかって来た。

うおお、これ、まさか……。

「煌月……?」

「はい、刹那様」

耳元に囁かれる、平淡だが風鈴のような涼しげな声。蒼い稲妻のような、刺激的だが優しい刺激でどこか爽やかな香りが鼻腔をくすぐる。

後頭部に、硬い何かが当たる。同時に、何か絹のように滑らかなものがかった。

……煌月が、俺の後頭部に顔を寄せ、背中から抱きついて来ているようだった。

「刹那様……私は、あまり積極的な方ではありません。ですが……此の想いは色褪せたりしません、決して。」

刹那様が望むのなら、夜白 煌月は、刹那様に隷従する麒麟は……」

途轍もなく大きな胸の感触が、背中をじっくりと刺激してくる。

クールすぎる声色、だが縊りついてくるような儚げさも籠った声色と共に、息が後頭部や耳にかかった。

「ふふ、お兄ちゃん……ドキドキしているの？ だったら、もっと感じてほしいなあ……。お兄ちゃんを癒すためだけにある、この身体を……」

そして視線を下に向ければ、上目遣いで甘えたように豊満で柔らか

な身体を押し付けてくる輪廻が、指先でリズムカルにトントンと俺の胸板を叩いている。

.....。

「.....」

ペチン、と二人の頭を叩く。

「あ.....」

「あうっ」

其の儘二人を離し、後頭部を搔く。

あーあ、まったく。

「輪廻も煌月も.....そういうの、急にするなって言っているはずだぜ？

大体こういうときは、サクか真名^{マナ}、若しくはアキラとか.....娘達の誰かが乱入して戦闘になるんだから」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。あいつらは、全員別の場所にいるから」

狐の耳をピクピク動かしながら、輪廻はにっこりと笑って見せた。

出来ない事を探すことの方が難しいのが輪廻、そして煌月だ。

俺なんかよりも、よっぽどスペックが高い上に、二人は絶対俺に嘘はつかない。確かめるまでも無く、本当のことだろう。

……先程言った“戦闘”が、俺には本物の“殺し合い”にしか見えない事は、もう慣れたが。

兎に角俺の家族はみんながみんな、俺のことになると険悪になるから……もう諦めている。

いや、止められない俺の無力さもあるのだが。

「其れで、話って？」

煌月が持つてきてくれたティーカップに口を付けながら、俺は輪廻を見つめた。

「あ、うん」

小首を傾げ、相変わらずニコニコ笑っている輪廻は、ぴよんとソファに飛び乗ると、妖艶な仕草で自らのカップに口を付けた。

「お兄ちゃん、この前創造神幼女に仕事頼まれたでしょ？」

そして耳に届く、先ほどとは打って変わって冷たい声。
……これは、結構キている時の声だな。
俺は苦笑しつつ、首肯した。

「一応俺は神だ。神の責務は果たさねばならない。なら、“世界”の管理は当然のことだろう」

その“当然のこと”とやらが、輪廻たちの気遣いのせいで殆ど無いのだが……という言葉は、無論、心の中に留めておく。

「それに、創造神殿も御困りの様子だったからな」

「 ツチ……」

「……」

豹変、まさにそうだろう。いや、輪廻の場合は“狐変”か？ など
という莫迦げた考えが頭によぎるが、直ぐにかき消す。

飲み干したカップをぞんざいにテーブルに置き、ドレスから見える
純白の煽情的な足を組んだ輪廻は、苦虫を一〇〇匹噛み潰したよう
な顔をしながら俯いていた。

……隠してるつもりかもしれないが、結構見えてるぞ、それ。

「 殺 塵芥^{チニ}が 死 必ず……」

ボソボソと小声で呟いていた輪廻は、再び顔を上げた。そこにあったのは、まさに花のような笑顔だった。

「お兄ちゃん、その仕事……私たちが代わっても、いいかな？」

「え？」

てっきり創造神殿に報復する許可を、何て言いだすと思っていた俺にとって、その言葉は完全に想定外だった。

「代わるって……“世界”の管理権を、輪廻に移すってことか？」

「そう」

「それは……」

出来ない話ではない。何しろ、目の前にいる我が妹は最高位神獣“天狐”だ。神力は、俺の数兆倍、いや、もっとあるだろう。彼女なら、創造神殿の創造した法則を捻じ曲げるくらいは鼻唄を歌いながらもできるだろうことは確実だ。

人間に渡すならいざ知らず、輪廻ならば可能だろう、いや、可能で

ある。

「そんなもの受け取って、どうするつもりだ？」

「当然、お兄ちゃんにゆっくり休んでいてもらって、私が管理をするんだよ」

今にもシヨツピングに行くような気軽さで、事も無げに言い出す輪廻。

仮に管理権を委譲されたからといって、あくまで神ではない輪廻にとっては其れなりの負担になるはずだ。

だが、何しろ輪廻は創造神殿を「幼女」呼ばわりする二人のうちの一人（ちなみに残りは煌月）だし、上級神など全員瞬殺できる実力を持っている。

それでいて、まだ彼女の“進化”は止まるところを知らないそうだから、もう凄まじいの一言だ。

「いいのか？」

「お兄ちゃんを疲れさせるなんて、絶対に許さない」

笑顔。だが、有無を言わせぬ口調だった。

勿論俺が頑なに拒否すれば、輪廻は折れるだろう。自ら俺の奴隷を公言している輪廻は口先だけではなく、俺に逆らうことは全くいつていいほど無い。

だが……考えてみれば、拒む理由も無いだろう。

「煌月は？」

「私は刹那様の御意志に従いますが、敢えて言わせて頂くのであれば、輪廻に賛成です」

いつも通り淡々という煌月の表情は、普段通りの無表情だった。

「あと、お兄ちゃん。場合によっては煌月の力も借りたいの」

「おう、いいぞ」

「……輪廻、私には刹那様の」

「大丈夫、千雨ちあめや夕映ゆえにでも任せておけばいいよ。どうせ、あの二人は暇ひまだろうし」

「……わかりました」

微かに頷いた煌月の反応を見て、輪廻は満足げに頷いた。
そして、俺に視線を向ける。

「有難う、お兄ちゃん。忘れないでね？ 夜白 輪廻はお兄ちゃん
の妹で奴隷。お兄ちゃんに全てを捧げ、全てを護り、全てを叶える
の。」

お兄ちゃんはやっくり休んでいてね？ 何かあったらすぐに連絡するし、日に一度は戻るよ。私にとって、お兄ちゃんがない場所に何の価値も無いんだから」

そこまでいって俺の足元に跪いた後、輪廻はフッと消えていった。

「……煌月」

「はい、刹那様」

「……大丈夫かな、輪廻」

「?……何にとつての、大丈夫でしょうか？」

その問いに、俺は答えることができなかった。

2 刹那side 麒麟と妹の願いは（後書き）

此処までプロローグ的な話。次回は娘達のお話です。

御意見御感想宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0011y/>

魔法先生ネギま！～狐と兄の燈し語・改～

2011年10月29日00時52分発行